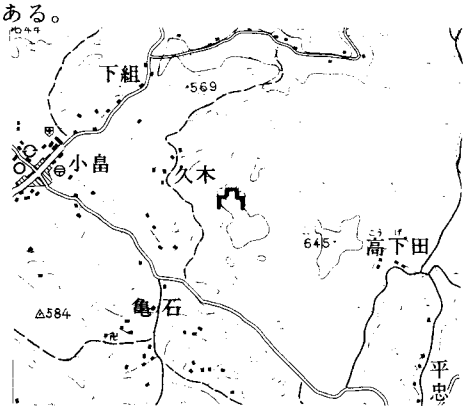
（シリーズ）備後の山城　　城郭研究部会編

No. 1　九鬼（くき）城跡（神石郡三和町小畠）

神石郡は高原と神様の郡である。どんな小さな村でも目を鎮守の森へ移すと立派な〝おやしろ〟が森厳とした杉木立に囲まれて立っている。

ところで、神石郡の南半を占める三和町の中心小畠集落から東方を眺めると丘陵越しに頂きを平らにした山が目につく。山城マニアでなくとも「これは城跡だな」と気付く筈である。



九鬼城跡附近（1：5万 上下）

これが戦国時代、在地豪族の馬屋原氏の拠った九鬼城跡である。

「九鬼」の名はいかにも荒々しく、我々に「戦乱の城塞」といったイメージを抱かせるが、西麓の部落は「久木（くき）」と呼ばれていて、城名は地名に因むものであることがわかる。城郭の特色としては竪堀（たてぼり）が多用されていることと、主郭背後の空堀群が見事なことが挙げられる。竪堀は戦国中期に流行したものと言われ、この城の築城年代を示しているようである。又、全体的に見て遺構を良く残しており、一見の価値ある山城跡である。

城主馬屋原氏は伝承によると坂東平氏の流れを汲む平正友が備中国水越馬屋原村を領して「馬屋原蔵人允（うまやはらくらんどのじょう）」と称したことに始まり、五代貞宗は神石郡志麻里荘（三和町小畠周辺）を領し、上に有井城を築いて住したという。其後戦国期になると馬屋原正国は小畠に新城を築いて本拠を移した、これが当九鬼城であるという（『神石郡誌』）。

馬屋原氏には九鬼城馬屋原氏の他に、小畠の北方にそびえる固屋（こや）城を本拠とした一族もあり、その家譜によると清和源氏の流れを汲む上総国の馬屋原光忠が鎌倉時代末に神石郡に下向したと伝えている。この固屋城馬屋原氏は戦国時代に安芸の毛利元就の幕下に入り、子孫は毛利氏の防長移封に従って萩に移住し、長州藩士として幕末に至っている（『萩藩閥閲録』巻四十一　馬屋原弥四郎）。

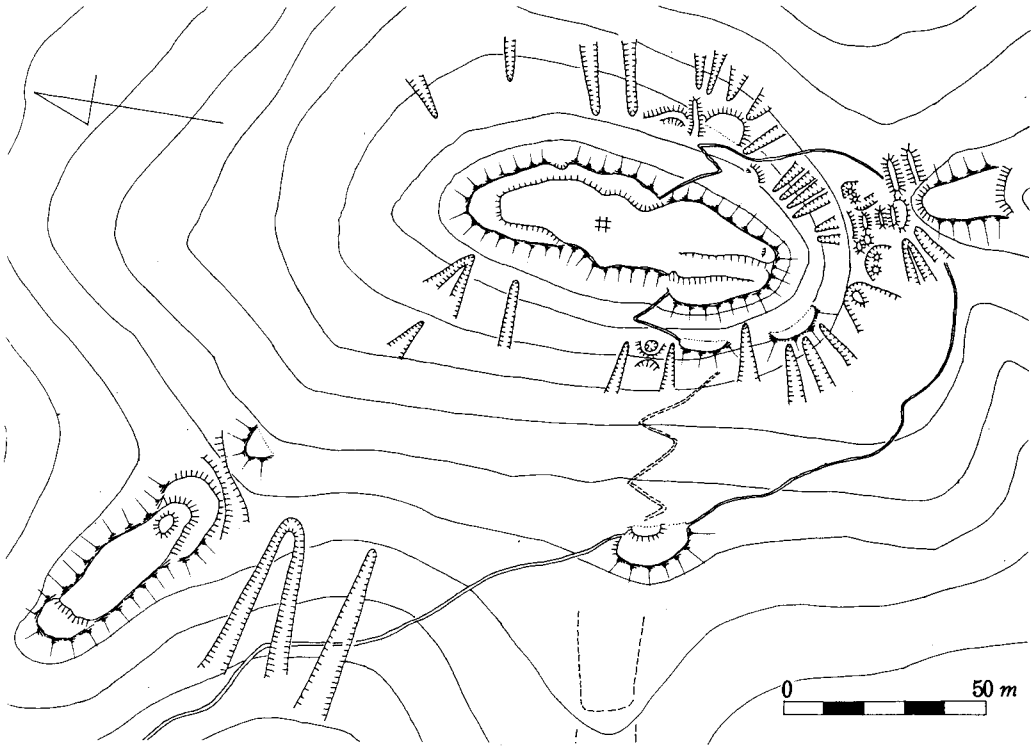
九鬼城山を望む（久木部落より）

このように固屋城馬屋原氏の方は江戸期にも武士階級として存続した為史料を残しており、その動向はやゝ判明する。しかし、九鬼城の方はそうではない。この九鬼城主の子孫と称する芦品郡向永谷の人、馬屋原呂平は江戸後期に『西備名区』を著わし、自らの家系をも詳説している。それが『神石郡誌』の記述の基を成しているのであるが、一つ一つの事柄を検討していくと史料的な裏付けを欠くものが多く、鵜のみにするのは危険である。

他方、戦国期の文書を見ていくと天文から弘治（1532～57）にかけて馬屋原信春という人物の名が見える。この人物は弘治三年（1557）二月二日の備後国衆連判の起請文（毛利家文書225号）では馬屋原氏を代表して署名しており、一族中では最も有力な人物であったと思われる。跡を嗣いだ馬屋原少輔五郎（後兵部太輔）は永禄十一年（1568）二月七日、毛利氏より志麻里二五〇貫、豊松四ケ村（神石郡豊松村、上、下豊松）四四〇貫余の地を安堵されており、天正末年（1590頃）にも神石郡内で八六三石（年貢高）の知行地を持っていた。この子孫が長州藩士馬屋原山三郎家であるが、この家に伝わった文書の中に毛利氏重臣桂元澄から「くき御つほね」へ充てた書状が残っている。「くき御つほね」は馬屋原信春の妻を指しており、他の用例から推してこの「くき」は「九鬼城」を指すものに相違ない。この家には系図が残っておらず、断言ははばかられるが馬屋原山三郎家の系統が九鬼城馬屋原氏であったと思われるのである。（『萩藩閥閲録』巻四十一　馬屋原山三郎）

以上、城主の考証に紙面を取り過ぎたキライもあるが、地方史の中で山城跡を資料として生かす場合、その作業を略すわけにはいかない。この点、読者の諒解を得たい。

（田口　義之）



九鬼城跡